

○
君を見そめし湖岸の

葦の一葉をそと切りて

捲きてし吹けば我笛の

しらべは高うなりにけり

朝鮮の神話

(於帝國文學會
第四回講演會)

坪井九馬三

私は『朝鮮の神話』といふ題を出して置きました。神話と申すのは必ずしも文字の通り神様の御話ではございませぬ。是は實は翻譯言葉であります。其原語はギリシアの言葉でありまして、*Ombros* ホーミイトスと申します。即ち廣い意味に於ては總ての『話』といふことであります。が狭い意味に用ひますると『作り話』といふことであります。事實ないことを面白可笑しく殊更に作りましたものを指して申すことである。併しギリシア時代より今日に至りますまでの仕來に依りますれば同じ作り話でありまして、太古の時代に一の國民がまだ極めて幼稚な時に

○
ひびけ今宵もとく響け
新月あをき森上まで
森のなかなる城にまで
城の窓なる君にまで

其幼い頭を以て、天地間の顯象を説明致す積で色々の話を作りました、これがその國民の最も古い時代より傳へて居ります所謂古傳と申すものであります、それを通常ミイトスといふ例になつて居ります。私の申すのも此の意味に於て用ゐるのであります、決して神様方の御話を申上げる次第ではございませぬ、一の國民が太古より語り傳へて居る話、又其頃の極めて幼い頭で拵へ出しました話であります、それが遺つて居るのであります、それ故に物の性質と致しまして今日の進んで居ります諸君の頭で御考へになつては神話は如何にも馬鹿／＼しい、如何にも子供ッばい、如何にもつまらぬ話であるとは知れ切つたことで、十歳未滿の極めて教育のない子供が申すことと同じ性質のもので、理窟に合つて居らう筈はない、唯神話といふものはさういふものであると御考へにならなければならぬ、それに理窟理合があらうなんといふことは注文違ひ御門違ひであります、是は何れの國に於きましても同様のことで、國に依りますと頗る神話に富んで居ります、又國に依りましては甚だ貧いのがあります、朝鮮の如きは極めて神話に貧い國の一であるのです、又少々ありました所で、何様書籍の誠に乏しい國であります、昔から語り傳へて來ました話の書卸しも亦乏しい、其上に朝鮮は佛教より文化を得ました國でありまして、朝鮮の文化は先づ以て佛教が起したものと見て宜

しいのです、それ故に此の國の神話は甚だ佛教臭うございます、多くは坊さんの手に成りました話かと思はれるのである、斯様に後世に作りました話は偽神話であつて、眞神話でない、朝鮮には此の偽神話が甚だ多うございます、最も有名なる神話などが皆偽神話である、彼の國祖壇君の話などは坊さんの作りました偽神話であります、それから伽羅カハラといふ國がありました、本邦が夙くより領して居りました所で、朝廷より特に任那ニハといふ國名を賜つて居りました、我等の祖先が外國を知りましたのは此の伽羅が一番初であつて、此の伽羅より次第に外の國を知つたのでありますから、昔は外國のことを伽羅と言ひました、オランダも伽羅なれば、イスパニアも伽羅、ロシアも伽羅なり、シナは勿論伽羅である、此の伽羅の國の起原に關しまする傳説があります、申すまでもなく坊さんの作りました偽神話である、斯様な次第であつてどうも致方がないので、それで私は是から佛教臭くない部分で眞正の神話であらうと思はれるものの標本を諸君に御紹介しやうと思ふので、取り敢へず古くからして既に書卸されて居る神話を御話し致します、實際朝鮮に参りまして或は歌に傳へてありまするか、或は諺に傳へてありまするか、或は迷信に依つて傳へてある所のものを探りましたならば、もうちつと神話が出るだらうと思ひます、私が、私は左様な暇もない、まして其の方の専門家でもないから此の方面の

ことは一向存じませぬ、或は探して見たらば一向ないかも知れませぬ、つまり消極的の仕事となるかも知れませぬが、それはやつて見なければ分らぬのであります、でこれより古くより書籍に上つて居ります神話を紹介いたしませう。

神話といふものは色々な事物に托して出来て居るものでございしまするが、朝鮮の神話にはどういふ種類があるかと申すに、先づ天體に屬するものから申しませう。

朝鮮の古い話には天とか天帝とかいふことが往々出ます、天を祭るといふこともございします、併ながら具體的に天といふものは何を以て現はされて居るかと思ひますと、多く日光を以て現はされて居る、日光に依つて生れた子供、之を天帝の子といふ例になつて居る、即ち太陽の光線が天といふことを代表して居る、所が又日と月とを以て天を現はして居る話がございします、其例を申上げませう、是は新羅の古傳でありまするが、どうせ年代は明白に分らぬ、詰り古くから傳つて居る話で、東の海の濱に延鳥郎、細鳥女、といふ夫婦の者が住んで居つた、海に漁りする所謂獵師でありました、此の郎は男といふことを意味し女は勿論女を意味して居る、延鳥、細鳥と申すのが名であります、此の夫婦の者が居りました、或る日のこと夫の延鳥が海に參つて藻を採つて居つた、さうしますると出拔けに一つの岩が現はれて來

た、一説に一つの魚ともある、此の岩か魚かが延鳥を脊負つて日本に連れて來た、さうすると日本の國の人が之を見まして、是は非常の人であるといふので尊敬して、立てゝ王と致した、そこで家に居る妻の細鳥は亭主が歸つて來ないから不思議と思つて甚だ心配して居つた、さうすると濱邊に亭主の脱いで置いた草履を發見した、何處にそれがあつたかといふと或岩の上に草履があつた、そこで草履を取りに岩の上に上つた、さうすると岩が動き出して妻君を又日本に連れて來た、日本の人は驚いて此の婦人を連れて朝廷に參つて此の旨を申上げた、さうして日本王が見られると國に置いた自分の女房であるから、驚いて直ぐに之を王妃に立てられた、然るに此の夫婦の者が日本に參つてこの方新羅の國に日も月も少しも光がない、そこで是は大變であるといふので、卜筮者に審しく調べさせました所が申すには、以前は日月の精が當國に降つて居つた所がそれが今は日本に參つて仕舞つた、それ故に此の如く暗闇である^{くらみ}と申した、そこで新羅王が驚いて、早速日本に使をやつてどうか歸つて下さるやうにと願つた所が延鳥の申すには、予が此の國に參つたのは天の然らしむる所である、人意でない、依つて今新羅の國に歸らう道理がない、併なから予の妃が豫ねゝ織つて置いた細^こ絹^{ぬい}がある、此の細絹を遣はすから之を以て天を祭れといふことであつた、そこで細絹を使者が持つて歸つた、さうして新

羅王に其の旨を申上げた、そこで延鳥の申す所に依つて天を祭られたのである、さうすると日も月も元の通りに光り始めた、それで此の細綃を國寶と致しまして倉を造つて其處に納めた、此の倉を貴妃と稱する、さうして天を祭つた場所を迎日縣と名けた、又一名都祈野といふ、迎日縣は固より漢名である、都祈野は原語でありませう、是れは日月といふ天體を掌つて居る所の精がありまして、其の精の爲めに日や月が光るものと考へた、日の神、月の神がありまして、其の神の作用に依つて日や月が始めて光るといふ考であります、此の日と月との精が片一方は男、片一方は女で、それが夫婦となつて新羅の國に天降つて、濱に漁業をして居つたといふ話です、是は天體に托した神話の例であります。

次に地理に托した御話を致します、朝鮮人は矢張り本邦人と同じく、總ての山、總ての川に何れも皆神があつたものと信じて居つた、殊に山には何れも皆それ／＼の神が鎮つてござる、それ故に極く古くから鎮座の宮があります、是は新羅の有名な武將金庾信——即ち百濟を滅して朝鮮半島を定めました新羅第一の忠臣たる金庾信の事蹟の中に出ることであるが、斯ういふことである、金庾信が高勾麗百濟をどうして滅したら宜らうといろ／＼工夫を凝して居る頃のことであつたが、自分の手許に召使つて居る白石といふ者があつて、謀に參つて居つたのである、そ

こで結局のところ白石が勸めて將軍と私と兩人で窈かに敵狀を探りに参りませうと言つて偵察に出掛け、其途中或る峠に掛つて少し憩うて居ると、若い女が二名跡に附いて上つて來た、さうして一行骨火川といふ所に着いて泊つた、さうすると又女が一名此處にやつて來て婦人が都合三人になつた、それで金庾信が三人の女を相手にして四方山の話をして居ると、三人の女が菓物を出して進上した、金庾信之を受けて早速味ひながら、どうして女の身で此の邊を夜歩いて居るのであるかと、段々話を仕懸けて見ると、婦人等が申すには、將軍どうか白石を御遠けなすつて、私共と共に森の中に御這入り下さい、さうすると事情を申上げますといふので、よしと言つて白石を連れず婦人等の案内する森の中に這入つた、さうすると三人の婦人が神の形を現はして申すには、妾等は奈林、穴禮、骨火といふ三箇所の護國の神である、今白石が將軍を敵地に連れて行かうとするのを將軍は知らずして御進みになつて居る故に形を現はして此の事を御注意するのであると言つて、忽ちに形は消ひて仕舞つた、それから段々調べて見ると、白石といふものは敵の間牒であつた、それで全度信は此の三神を甚だ崇敬致しました、是が一つの山或は川に孰れも皆それ／＼の神があるといふ御話。

次に動物に托したものを御話しませう、色々様々な動物が何處の國の神話にも

出て参ります、朝鮮にも動物に關する神話が一番多い、其中純粹の神話らしいものを採して御話し申させう、動物に屬するものゝ中で龍の話が一番多い、龍は勿論神變不可思議の物でありまして、殊に佛教が鼓吹いたしたものである、龍王と申しまして龍のことを頻に言ひます、實は龍ではない、蛇である筈です、兎に角此の龍の話が矢張り佛教の勢力に依つて出来ました偽神話に盛に出て居ります、龍に關する偽神話は實に澤山な數でありますが、それは悉く棄てまして、先づ龍といふものの觀念は朝鮮人の頭腦にどう描かれたかといふことを一つ申しませう、茲に斯ういふ話がある、新羅の聖德王の御代(紀元七〇二―七三六)純貞公といふ王族が今の江原道の江陵の知事になられました、御夫婦で赴任されたのである、さうしますと丁度途中のことであるが、或時に海濱で午御飯を食べられた、さうすると海龍が現はれて参りまして、忽ち奥方を捉へて海に這入つて仕舞つた、そこで純貞公途方に暮れられて困つて居られた所が、聴て一老人が参つて策を献じて、其策に依つて龍が夫人を奉じて海から出て参つて無事に御還りになつた、そこで純貞公が夫人に海の中はどういふ有様であつたかと尋ねらるゝと、非常に立派な七寶を以て飾つた宮殿があつて、供せられた所の御馳走は非常に甘い非常に香ばしいもので、到底人間の料理でないさうで、現に夫人の御服(おめ)に何とも得も言はれぬ異香が薫つて

居る、此の純貞公の夫人は名を水路と申して非凡な御容貌であるので、深山大澤を過る度毎に始終魔物に狙はれて御困りなすつたのである、それで老人が策を獻じて、其策に依つて龍が、非を改めて夫人を海中より御還し申したといふのは、どういふことであつたかといふと、一首の歌を作つて皆して木の枝で濱を敲きながら其歌を御唄ひなさい、如何に龍と雖も必ず奥方を御還し申すに相違ないからと言つたのであつた、其歌は漢文で傳つてあります、が『龜乎龜乎出水路、掠人婦女罪何極、汝若悖逆不出獻、入網捕掠燔之喫』といふのであります。此の歌にあります通り朝鮮人の龍といつたのは龜であります、尙ほ此の他にも古朝鮮人の所調龍は龜であつた證據が随分あります、が、此の話が尤も適切な例であります。

次いで出ますのは虎であります、虎は壇君出生の事にかゝりあつて既に出て來ますが、已に申した通り偽神話であります、之を省きまして確かと思はれる神話を申上げませう、是は新羅元聖王の御代(七八五—七九八)の話となつてをるが、どういふことであるかといふに、新羅の風俗に二月の八日乃至十五日の間に都の士女が興輪寺といふ御寺の堂を繞つて祈願をする、茲に金現といふ人があつて、夜ふけに獨り堂を廻つて居りました、さうすると一人の娘がありまして念佛を娼へながら金現と一緒に堂を廻りました、そこで金現は此の娘を面白いものに思ひ

まして、堂を廻り終つて後に、懸て傍に引入れて遂に結婚して仕舞つたのである。娘は直ぐ歸るといふ、金現は送らうといふ、娘はどうぞ止して下されといふのを、金現が強いて送つて行つた、西山の麓に至ると茅ぶきの家が一軒あつて、内にお婆さんが一人居る、娘が歸つたのを見て其の附添うて來た人は誰だといつて尋ねた、娘がかやうくと事情を述べると、お婆さんがいふには、どうも宜しくないけれども、今更仕方がないから内に隠して置けといふので、内に入れて奥に隠した、暫くすると虎が三匹家の前に來て、烈しい聲を出して哮へて懸て人間の言葉で喋り始めたのを聞くと、家の内に生臭い匂ひがする、丁度空腹だから至極結構だと呟鳴つて居る、婆さんと娘とが怒つて何たる氣違ひじみたことをいふかと叱るやうにいふ時に、空に聲があつて、汝等は頻に物の命を害ふ癖がある、其中の一つを誅して惡を懲さなければならぬといふと聞へた、三匹の虎は驚いて悲みの色を現はした、さうすると娘が申すには、三人の兄さん達は遠くに遁げて慎んで下さい、私が兄さん達の代りに罰を受けますからといふと、三匹の虎は家に這入らずして、首を垂れ尾を下げてしほくとして遁げて仕舞つた、そこで娘は奥に來て金現に向つて申すには、唯今申したことを御聽きでせう、今は隠しても仕様がないうゑ申上げますが、御聞きになつた通り私は人間でありませぬ、併し義は重いこと、あり三匹の

兄は天の罰を受けるに極つて居ります、斯うして居ればいつか人の手に掛つて死ぬのであります、一家の殃を私が獨り引受けて死ねばそれより幸なことはありませぬ、どうかあなたの御手で殺して戴きたいといひ、更に言葉を繼いで明日町に參つて散々に人を害める積りであります、誰も私を捕へる者はありませぬ、王は困られて重い賞與を懸けて、私を捕へる者を御募りになりませう、そこであなたが早速募りに應じて王の御前に御出なさい、さうすれば私は城北の森の中に隠れてあなたの御出でになるのを待つて居ります、金現は答へてそれはいけない、今更人間でないからというて殺すことは出来ない、所が娘が申すには、何と仰しやつても私のいのちはけふ盡きました、どうせ死なねばなりませぬ、私の命をあなたに差上ぐればあなたの慶事になる、私の一族が助かる、國の人全體の喜びとなる、私一人死んだ爲めにさまぐの利益がある、是非私の申す通りにして頂きたい、若しあなたが私の爲に寺を建て、冥福を祈つて下さるならばそれより上の御恩はありませぬ、と言つて別れた、翌日果せる哉、猛虎が一匹新羅の都に暴れ込みまして人を頻に害ねる、王大に怒られて此の虎を殺す者には爵二級を賜はるといふ重賞が下つた、金現は王の御前に參つて、私が猛虎を捕へたいと申出た、王は其の勇氣を愛し先づ爵を賜つた、そこで金現は短刀を持つて森の中に這入つて見ると、果して娘

が待つて居て喜んで迎へていふには、昨夜申した通りに是非して頂きたい、私は大分人を害ねたけれども皆爪傷で、あれは興輪寺の醬を塗りさへすれば直ぐに癒ります、と言つて金現の携へて居つた短刀を申受けて自ら頸ねて死んだ、其の死骸を見るとなるほど虎であつた、金現は森を出て虎を討留めたことを報らせ、それから傷を受けた者には聞いた通りの處方をした、さうすると害を受けた人の傷が皆癒つて仕舞つた、そこで金現は重い地位に擧げて用ひられて此の虎の爲めに虎願寺といふ寺を建て、其の冥福を祈つたといふ話であります。

もう一つは茲に申屠澄といふ人があつた、是は所謂の讀書人でありまして、學問をして貞元九年に或る縣の小役人になつた、其赴任しまする時に吹雪に遇つて馬は進まず大に弱つた、さうすると路傍に茅ふき家があつて火が焚へて居る、内を窺いて見るといろいろの側に老人夫婦と娘があつて、火を圍んで居る、娘の年は僅に十四五である、髪はおどろになつて居り、着物は垢だらけであるが立舉動がやさしくて天成の麗質と認めた、申屠澄も苦しまぎれ此の家に泊めて貰はうと思つて内に這入つた、さうすると寒いのに御疲れてあらう、先づ火にお當んなさいといふので色々親切にいつて呉れた、そこで火に當りながら夜はふけるし、吹雪は止まず、仕様がなないからどうか宿めて下さるまいかと言つた所が見らるゝ通りの粗末な所で

あるけれどもお構ひなくばお泊んなさいといふ譯、遂に此の夜は泊つた、娘はかくと知りまして身じまひし着物を着換へて出て來ましたが、愈々奇麗であつた、翌朝去りまする時に主人の老夫婦に向つて申しますするには、當家のお嬢さんは頗るお利巧のやうに拜します、若し他に御約束がなければ私が申受けたい、どうでせうかと言ふと、どうも貴客より御申込があらうとは思はなんだが若し御懇望とあらば上げても宜しいと答へたので、喜んで取敢へず妻として引取りまして自分の乗つて來た馬に乗せて任地に連れて行つた、所が書生から俄に官に就いたので、固より微官のことではあり甚だ家の暮しがむづかしいのを此の妻君が一生懸命に骨折つて、兎に角家庭を成して仲よく居つた、其の頃申屠澄が妻君に贈つた詩に

『一官慚梅福、三年愧孟光、此情何所喻、川上有鴛鴦』

といふのがあります所が最早任期が切れて國に歸らなければならぬ、其時既に一男一女があつて甚だ愛して居つた、愈々國に歸るといふ時妻君が

『琴瑟情雖重、山林志自深、常憂時節變、辜負百年心』

といふ詩をつくりまして夫にむくいました、それで途中に妻君の實家に寄つて見ました、さうするとどうしたのか老夫婦は居ない、家は空明からあきになつて居る、妻君は痛く嘆いたが、壁の隅に虎の皮が一枚あつたのを見て、喜んで之を取つて被るかと思

ふと俄に虎となつて、哮へたけつて飛出した、亭主の申屠澄は驚いて二人の子供を連れて追駈けたが、勿論虎に追附く筈がない、徒らに深林を望んで數日間大に嘆いて居たが、やがて行衛不明となつたといふ話であります、是が虎化とらばけの話趣は少く違ふが兩方とも良く出来て居ると思ひます。

(九四)

次は狐の話、狐の話は支那あたりにもあるし、本邦の話にも頻に出る、所が朝鮮にも狐の話が矢張りあります、其中で興味のある狐の話を申し上げます、是は圓光といふ有名な坊さんのこと、此の坊さんの履歷の中に載つて居る話であります。是人がまだ山中に籠つて世間と關係を斷つて修行をして居つた頃のこと、三岐山といふ山に籠つて修業をして居ると夜々色々なことを申す聲が聞える、或時に聞へるのは、我は此の世に在ること既に三千年で神術を極めたものである、併し此の如き神術などは自分に取つて朝飯前の仕事である、どんな將來のことでも、天下の如何なることも己れの欲することでは出来ぬことはない、今汝を見るに、此處に居つた所が自分を利する行ひにはならうが、他を利する功はない、現在に高名を揚ることもようせねば未來に冥福を収めることも出来ぬのである、速に入唐して佛教を窮めて歸つて之を朝鮮に施すが宜いといふ言葉が聞へた、所で圓光之に答へて申しますには、入唐して佛法を學ぶことは固より自分の本願であります、されど海陸

の道は遠いし如何様にも致方がないので、かやうに致して居る、若し私を唐に御連れ下さるならば自分に取つて此の上ない仕合せであります、よし承知したといふことで圓光は入唐して十一年間留學致しました、歸國の後に神に謝する積りで元の三岐山に参りました所が、また神が現はれていろ／＼話を致しましたが、圓光法師が申すには、どうか神の本當の形を拜見いたしたい。神は汝若し我形を見んと欲するならば明日の曙に東の天の際を望んでみなさいと言はれたので、其の通り致しますると大きな臂が現はれて居りまして、雲を貫いて天の際に接して居るやうに見えた。其の晩に神が來て、法師我臂を見たか、拜見いたしました、奇絶でありました、斯う答へたさうで是より俗に此の三岐山のことを臂長山と申す、そこで神が申さるゝには我も矢張り無常の風を免れぬのである、幾何もなく我身を此の山に捨ててから、法師は來つて葬式を營んで呉れとのこと、日を約して別れた、約束の日に山に行つて見ると一匹の狐が死んで居る、如何にも古狐、色は眞黒で漆の如しと云うてあります、是が狐化きつねばけの話であります。

次は蚯蚓の話、是は新羅の晩年のこと、御承知でもありません、後百濟といふ國が起つて、それが二代で亡びて後高麗が朝鮮を一統しました、其の後百濟の太祖は甄萱と申して今の全羅道を根據地として起つたものであります、が、甄萱の甄はケ

ンとシンと音が二つあります、固よりケンが本音でありますが、三國の呉に於て堅の字を諱みまして甄をシンと發音したといふことで二音となりましたが、後百濟は吳越と親しい交際がありましたで、或は吳音を取りましてシンと讀みましたが、かも知れませぬ、兎に角孰れてあるか當人を墓から起して問ふて見なければ分らぬ話である、つまりケンケンかシンケンか確に分らぬ、此の人に關する申傳か面白い、光州の北の或る村に富んだ人が居つて娘が一人あつて、姿や容が奇麗であつた、此の娘が或る日お父さんに向つて申すには毎晩紫色の着物を着た男が來て私と一緒に寝ますといつて報告をしました、所で親父さんが申すには、それではお前長い糸に針を付けて其男の來た時に着物に刺して置けと言付けた、そこで娘が其通りに致して夜が明けて後に此の糸の行衛を探つて見ますと北側の垣根の下に糸が行つて居る、段々調べると北の垣根の下に大きな蚯蚓が居つて、其の腰に針が刺つて居つた、それから後は是の男が通つたかどうか書いてないが、兎に角娘は妊娠して男の子が生れた、是の子が即ち甄萱で蚯蚓の子であるそうです。

次は鼠であります、是も矢張り新羅の古への話であります、新羅の毗處麻立干か或る時離宮に御出でになつた、さうすると鴉と鼠とが參りました、鼠が人の如き言葉で申すには、此の鴉の去る所を御尋ねなさいと言つて消えて仕舞つた、兎に角鼠

が人間の如く物を言つて王に或る重大な忠告を致したといふことが出て居る。麻立干といふのは漢語がまだ這入らぬ時代に新羅に於て用ひました尊號であります。

次に植物に托して作つた話を申し上げます、植物に關する神話はアフリカ邊に隨分澤山あるやうであるが、東洋には餘りありません、茲に一つ新羅景文王八六一—八七四の代の話がある、此の景文王は生れ付き大層耳の長い人で、恰も驢馬の耳のやうであつた、それを王妃も女官方も一向知らぬ、唯王の爲めに頭巾を拵へる所の職工が一人だけ此の秘密を知つて居つた、此の職人は知つては居ますけれども勿論王の秘密であるから平生唯にも之を語りませぬ、所が此の職人が死に掛つた時に、道林寺と申す御寺に竹藪がある、其の藪の中に參つて人の近邊に居らぬ時に竹に向つて、『吾君の耳は驢馬の耳の如し』と奴鳴つて遂に死んだ、其後風が吹いて竹が動きますと、其の都度竹に聲があつて、『吾君の耳は驢馬の耳の如し』といふと聞える、王甚だ面白くないので、此の竹藪を切つて仕舞つた、其代りに山茶莢さんしやうといふ木を植ゑさしました、此の木は本邦にも傳はつて居て黄いろい花を開きまして葉が落ちて後にもグミのやうな大きい眞赤な實が枝に着いて居て至極雅致のあるものです、所が風が吹くと矢張り山茶莢に聲がありまして、『吾君の耳長し』といふ

と聞へた、此山茱萸の林はどうなつたか分りませぬが、詰り竹と山茱萸とが斯ういふ奇怪な聲を出したといふことであります。

それから鬼の御話を致します、鬼といふものは一種奇妙なものでありまして、國に依つて色々に違ひます、本邦人の所謂鬼といふものは何だか能く存しませぬが、彼の二本角が生へて虎の皮の褌を締めて居るものが鬼であらうとは一概に思はれませぬ、兎に角新羅に眞智王(五七六—五七八)といふ王があつた此の王の時に都の附近の村に大層奇麗な娘があつて時の人ほめたゝへて此の子を桃花娘と稱して居つた、そこで王が桃花娘を宮中に召さうと致しますと、娘が申すには二夫に事へずと申します、私には夫がございまするで參られませぬといつて斷りました、さうすると王は殺して仕舞うといつて嚇しました、寧ろ私をお斬り下されと答へた、依つて王は改めて、それでは夫がなければ宜いのかと申さるゝと、それなら宜しうございまずと答へた、それなら宜い家に歸れといふことで免された、さう斯して居る中に王は死んだ、娘の亭主も死んだ、十日ほどたつて或る夜王は生前の時の姿を娘の前に現はして、最早御前の亭主は死んだから宜いではないかと言はるゝ、そこで娘が其の事を父母に告げると、王の命であるから従はねばならぬといふことで許可を得た、此の結果として娘は妊娠して、月満ちて分娩する時に天地震動して男

の子が生れた、之を鼻荊と名けた、そこで嗣王の眞平王(五七九—六三一)が此の子のことを聞かれて宮中に召して御育てになつて居ると、十五歳になつた時に毎夜遠遊びに出掛ける、王は勇士五十人を鼻荊郎に附けて始終護衛せしめられたが、勇士等も如何様にするとも出来ぬ譯は、郎が城壁を飛越して行かれる、何處に行かれるかを見ると荒川といふ河の岸に行つて鬼を數多集めて遊んで居られる、そこで御附の勇士等は森の中に隠れて色々様子を窺ひました、さうすると曉の鐘が鳴ると皆バラ／＼去つて仕舞つて郎も宮中に御歸りになる、此の事を報告しますと、王は鼻荊郎を召して申さるゝには、汝は鬼を率ゐて遊んで居るといふが左様か、左様でございます、王は語を繼いで、それでは汝に申付けることがある、鬼を率ゐて神元寺の北にある渠(はし)に橋を架けよと命しられた、依つて郎は鬼共に命して鍊石を作らしめて一晩に大石橋を架けました、之を鬼橋と申した、王又尋ねらるゝには、汝の連れて居る鬼共の内に人間となつて政事向の輔佐をする者はなからうかとある、御答に、ございます、吉達と申すものが國政を輔佐致すに適任でございますと申上げると、早速連れて來いといふ仰せ、翌日早速吉達が鼻荊郎の供をして來た、そこで吉達は御召抱へになつたが、忠直無雙で頗る御役に立つ、當時林宗といふ王族に御子がなかつたので吉達を養子に遣はされた、さうすると養父の命で興輪寺の南に

樓門を造つて吉達が毎夜こゝに泊りました、それで俗に之を吉達門と稱へた所が或る日吉達は狐に變じて逃げた、鼻荊郎は之を聞いて不埒であるといふので他の鬼共を遣して吉達を捕へて殺しましたこれより鬼共は鼻荊郎の名を聞くに皆逃去つたといふことである、朝鮮の鬼といふものは斯様なものである。此他に疫病神も人間の眞似を致しまするが今は之を省きます。

(完)

表紙の意匠

本號の表紙は帝國文學の十周年を祝して新海竹太郎氏より寄贈せられたるものなり。